

待降節第1主日 12月第1週説教 2013.12.1

目を覚ましていなさい

マタイ 24章 37-44節

（その時、イエスは、弟子たちに言われた。）「人の子が来るのは、ノアの時と同じだからである。洪水になる前は、ノアが箱舟に入るその日まで、人々は食べたり飲んだり、めとったり嫁いだりしていた。そして、洪水が襲って来て一人残らずさらうまで、何も気がつかなかった。人の子が来る場合も、このようである。そのとき、畑に二人の男がいれば、一人は連れて行かれ、もう一人は残される。二人の女が臼をひいていれば、一人は連れて行かれ、もう一人は残される。だから、目を覚ましていなさい。いつの日、自分の主が帰って来られるのか、あなたがたには分からないからである。このことをわきまえていなさい。家の主人は、泥棒が夜のいつごろやって来るかを知っていたら、目を覚ましていて、みすみす自分の家に押し入らせはしないだろう。だから、あなたがたも用意していなさい。人の子は思いがけない時に来るからである。」

説教

きょうは待降節の第一主日です。教会暦では一年の始まり、日本風にいえばお正月です。待降節はクリスマス、25日から数えて4つ前の日曜日から始まります。四つの主日を4本のローソクにみたてて各主日に来るたびに一本ずつローソクを灯してその時、クリスマスが近づく時間を視覚的にあらわします。教会堂ではあまり見かけませんが、家庭ではアドベントカレンダーもあります。もういくつ寝るとお正月ではなくてあといくつ寝るとクリスマスって感じでしょうか。せかんどチャーチには待降節用の燭台？がまだ用意できていないので、いつもは白のローソクを2本立てている二つの燭台に赤と白のローソクを一本ずつ立てることにしました。きょうの待降節第一主日は教会が年の初めとする日、いわば元旦です。

1) 人の子の到来

人の子が来るのは、ノアの時と同じだからである。(マタイ 24:37)

人の子とはイエス・キリストのこと、来るとは再臨をいっています。ノアの時とは洪水をさし、終末、この世が終わる時をいっています。それはノアにとっては救いのときであります、ほかの人々にとっては裁きのときでもあります。正月早々に「救い」はめでたいことですが、「裁き」とは縁起でもない話、実も蓋もない話、あまりにも率直すぎて話が続くどころか終わってしまいます。しかし、教会は年の初めのメッセージを終わりの時、終末の日から始まめます。そして待降節第一主日、きょうのメッセージの核心は「目を覚ましていなさい」です。

2) ノアの時

洪水になる前は、ノアが箱舟に入るその日まで、人々は食べたり飲んだり、めとったり嫁いだりしていた。そして、洪水が襲って来て一人残らずさうまで、何も気がつかなかった。人の子が来る場合も、このようである。(マタイ 24:38-39)

テキストは洪水前と洪水が来たときの様子を語ります。「食べたり飲んだり、めとったり嫁いだり」とは人々がふつうに暮らしていた様子をいっているのでしょう。そして人々は何も気がつかなかったといっています。

主は、ノアの後ろで戸を閉ざされた。(創世記 7:16b)

創世記によると箱舟の入り口は主の手で閉じられます。そしてノアの家族以外の人びとは洪水に襲われ滅びました。

3) 目を覚ましていなさい

だから、目を覚ましていなさい。いつの日、自分の主が帰って来られるのか、あなたがたには分からないからである。(マタイ 24:42)

このテキストの中で「あなたがたには分からない」という点だけを強調する人がいます。人間の弱点、人間性の欠陥、つまりマイナスの要素として、そこにつけこみ世の人をまどわす事態は歴史において繰り返されました。そのような人たちは、終末の到来する日時を予言します。これが当たったため

しはないのですが、そのたびに多くのクリスチャン、世の人は動揺させられて来ました。聖書を素直に読めばすぐ分かることですが、主が聖書を通して私たちに呼びかけておられるのは、「目を覚ましていなさい」ということです。終末の日、主の再臨は普段は忘れていて、時々思い出せばよいという事ではないのです。

4) 問い続けること

しかし「目を覚ましておけ」といわれても混乱します。じゃあ、眠れないじゃないかってことになります。実際に終末のことを思うだけで怖くて眠れなくなった経験のある人も多いと思います。43節のたとえば泥棒を警戒するように「裁きの時を警戒してビクビクしながら生活する」ことを薦めているようにも読めます。でもまさかそんなことではないはずです。

わたしたちにとって、自分自身にとって「目を覚ましている」、再臨のときを待つ、ということがどのような意味を持つのか、またその上でどのように日々を暮らしていけばいいのか、時間に関する事柄、永遠に関する事柄としてこの問いを捉えると答えは簡単にはみつからないでしょう。それでもわたしたちは神の約束を信じて耐えず問い続けていくことが大切です。